

審査の結果の要旨

氏名 早川 雅也

本研究はリストカットを含む自傷行為を繰り返す、一般的には治療困難と言われる精神科患者群、その中でも特に境界性人格障害の患者、に対する現状の外来で実施可能として有効な治療法を探し出すことを目的とした。現行健康保険制度下では、一人一人にあまり時間をかけられないという制約のもと、assertiveness（本人が静かに自分を主張すること）に着目した小精神療法がある程度有効であるという仮説を立て、それを実証しようとして、下記の結果を得ている。

1. 2004年1月から2007年1月までの間に東京大学医学部附属病院精神神経科と鹿島病院精神科（茨城県鹿嶋市）の筆者の外来を初めて受診した、リストカットのある精神科外来患者（リストカット症候群とみなされる）を対象としており、3名の脱落を除き、主病名を境界性人格障害とする者13名を含む計19名が研究に参加した。
2. 小精神療法において、assertiveness への前段階として、本人たちの強烈な自己否定感情を打ち消す目的で、自分を好きになること、自分を許すこと、そして自分を尊重することが推奨された。そして本人の意思に本人の感情を従わせようとするのではなく、本人自身の心の声に耳を傾けるようすすめられた。究極的には本人自身に対する評価を高め（自尊心を取り戻し）assertiveness（本人が静かに自分を主張すること）を理解し、assertive に自分を表現することを目標とした。
3. 自傷行為の程度に関しては、全19名のうち14名で改善が見られ、そのうち境界性人格障害に限れば13名のうち9名で改善が見られた（Wilcoxonの符号付き順位検定で、 $P=0.006$ （両側）；同順位補正済み；順位和を正規近似して得られる統計量 $Z=-2.739$ ）。
4. assertiveness に関して、全19名で悪化したものはいず、assertivenessの程度の改善度を調べたところ、Wilcoxonの符号付き順位検定で（ $P=0.001$ （両側）；同順位補正済み；順位和を正規近似して得られる統計量 $Z=-3.826$ ）レベルの改善度となった。境界性人格障害の13名ではassertivenessの程度の改善度は、Wilcoxonの符号付き順位検定で、 $P=0.001$ （両側）；同順位補正済み；順位和を正規近似して得られる統計量 $Z=-3.182$ 、となった。
5. 境界性人格障害13名において、assertiveness の改善度と自傷行為の改善度でSpearmanの順位相関係数を取ったところ、 $r_s=0.815$ （1%水準で有意（両側））という高い数値が得られた。

以上、本論文は大学病院精神神経科と地域に根ざす一般精神科病院の精神科に比較的普通に受診する患者層に見られる、リストカット症候群を呈している境界性人格障害の患者たちに対する治療の効果を測定している。現実問題として治療にそれほど時間をかけられないため、ポイントを、自己イメージの改善、自分自身の許容、自分自身を静かに主

張すること、*assertiveness* の理解、に絞って行なった規則的な小精神療法（患者自身の考え方の盲点に対して、気づきをもたらすというニュアンスをこめて行なう）はある程度の効果があった。本研究では、境界性人格障害で 9/13、約 69%の有効率である。リストカット、特に境界性人格障害のリストカットの治療において、*assertiveness*（本人が静かに自分を主張すること）に着目した小精神療法は現在の制約下で何がしかの効果のある治療法であることを示し得た点で、今後の治療に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。